高専に任せろ！2018

第2部　陸海空の精鋭 ①

ニッポンのモノ作りの一翼を担ってきた高専が社会環境の変化に合わせて活躍の場を広げている。「高専に任せろ！2018」第２部の舞台は陸・海・空だ。空の安全、海の復権、そして陸の平穏。高専生が森羅万象に目配せする。まずは青い空が映える沖縄工業高等専門学校で始まった高専初の「航空技術者プログラム」をお伝えする。

沖縄から飛べ！航空人材

ハブ空港化　膨らむ整備業務

7月28日、沖縄高専で開かれたオープンキャンパス。来年か近い将来、ここで学びたいと考えている中学生やその保護者が白いキャンパスに入っていく。その一画では普通の高専では経験できない催しが行われていた。パイロットやジェットエンジンの解説講座、客室乗務員のお仕事講座。制服写真の撮影もあった。特別企画としてJALグループの日本トランスオーシャン航空（JTA）の全面協力のもとで企画されたイベントで、沖縄高専卒業生で航空業界に勤める先輩も駆けつけてこの業界の魅力を分かりやすく説明した。

国立高専で唯一

全国51ある国立高専の中で、明確に航空業界で働く人材を育成する教育プログラムが組まれているのは沖縄高専だけだ。

世界の旅客需要は年率5％で成長。国内でも格安航空会社（LCC）の就航が伸びている。航空会社や航空機産業などの成長期待が高まり、拠点空港として存在感を増しているのが、沖縄県の那覇空港だ。

那覇空港では、日本やアジア各地の食品や工業製品が集まる重要なハブ空港としての役割が軌道に乗ってきた。貨物の取扱量も年々増え、2020年には2本目の滑走路の供用も始まる。

沖縄県も17年に改定・公開した「沖縄県アジア経済戦略構想推進計画」において、航空機関連を県の新産業として育成する考えを盛り込んだ。そうなると喫緊の課題が、整備機能の強化。そして整備士など航空機人材の確保だ。航空会社は専門学校の卒業生を採用したり、自社で育てたりしているが、優秀な人材の獲得競争となっている。

白羽の矢が立ったのが、高度な理論と実践を両輪で備えた高専生だ。

「安全守る」意識高く

沖縄高専では、15年度から全国初の「航空技術者プログラム」がスタート。航空機の整備士やエンジニアなどを育てる専門的な授業が組まれ、早くも空を支える人材が育ち始めている。

「リベットをしっかりとおさめて。機体に影響が出ないように、滑らかな仕上げにしてね」。

沖縄高専の野外に設けられた施設では、学生5人が「リベット」と呼ばれるネジ部品を専用の工具でたたいていた。リベットを機体に模したパネルに取り付ける研修だが、たたき方が悪いと機体の亀裂の原因になってしまう。機体の整備の中でも重要な工程だ。

航空技術者プログラムは高専の通常の授業とは別に、希望者に対して実施する。受講者は週に1回、座学90分、実技180分の授業をそれぞれ受けなければならない。

沖縄高専には4学科あり、機械システム工学科、情報通信システム工学科、メディア情報工学科という3学科を対象に希望者を募る。面接などの選考を経た1学年10～15人程度が学んでいる。

JTAの出身で指導にあたる同高専の非常勤講師、伊佐哲夫氏は「少人数のプログラムだから、生徒への目も行き届く。自分でプログラムに応募してきただけに学生の授業へのモチベーションは高い」と話す。

実践技能教える

授業は4年生から始まる。1年目は航空機の整備に関する物理学などの基礎知識を習得。5年生になると整備基礎、航空実習といったより専門的な授業となる。卒業後はそのまま就職するほか、専攻科に進学してさらに高度な技能を学ぶ道もある。最終的に、国家資格である1等航空整備士や航空無線通信士を取得する人材を育てていく。

授業の中身は極めて実践的だ。教材はANAホールディングス（HD）の整備士が入社後に使用する基礎訓練資料。ANAHDが協力するインターンシップでは、沖縄空港などでパイロットや整備士が訓練で実際に使うシミュレータも活用する。航空機に関わる難しさと魅力を、肌で感じることができる。

同校のホームページにはこうも記されている。「採用試験かどこかの場面で、『そんなことまでしっているんだ』と面接官に言われる人になるようにします」。

ANAHD出身で整備士の資格をもつ機械システム工学科の田口学教授は「応募は自由だが、受講には強い覚悟が求められる」と話す。プログラムは強制ではない。それゆえに、受講を続ける強い意志も求められる。

プログラムからは多彩な人材が育っている。

JTAに勤める金城優生さんも同プログラムを自主的に受けた。「手を動かす仕事に興味がわいた」といい、現在はJTAで整備士として働く。

また、安元康貴さんは愛知県の大学に進学したが、プログラムのおかげで「もともとロボットなどの物づくりが好きだったが、飛行機の構造に興味がわいた」と話す。

インターンを通じて整備士を目指すようになった学生も多い。OBの天願優貴さんは「沖縄は県外に行くのに必ず飛行機を使う。地元の人の役に立ちたい」と意気込む。

17年度にプログラムを受講した履修生のうち6人が、ANAHDが全額出資で設立した航空機の整備・修理・改造を手掛ける「MROジャパン」をはじめ、LCCのピーチ・アビエーションなど関連企業に就職した。

航空会社のある整備士採用の担当役員は「飛行機が好きなだけでは困る。基礎的な学力と理論に裏打ちされた技術を学んできた高専出身者は頼もしい」と評価する。

沖縄高専では今後、航空機に関わる授業をさらに拡充していく考えだ。航空会社の整備士だけでなく、航空機やエンジンなどを扱う重工業メーカーも視野に入れている。

沖縄高専が航空機産業を支える人材輩出のハブとなり、各分野に羽ばたいた卒業生らが成果を出す日も近い。

（大西綾、編集委員　田中陽）

許諾番号30064329 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。